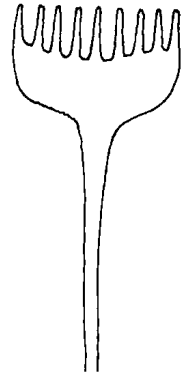
# 髪結いの亭主

三浦朱門

三浦朱門

# 髪結いの亭主



番町書房

髪結いの亭主

定価は表紙カバーと帯に表示してあります。

昭和四十九年十二月十日　初版発行

著者　三浦朱門

発行者　村川修二郎

発行所　（主婦と生活社内）番町書房

印刷　松濤印刷株式会社

製本　若林製本株式会社

東京都中央区京橋三―五　〒一〇四　TEL（五六七）
〇三一一振替東京一五八四四　©一九七四　三浦朱門

# 髪結いの亭主　目次

髪結いの亭主　7
焼酎と京菓子　29
夕映えの青春　55
アサリの海苔巻　81
約　束　107

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ジャングルの微笑　135
価値ある女房　157
持つべきは悪友　183
朴念仁の恋　215

装幀　和田　誠

# 髪結いの亭主

# 髪結いの亭主

# 一

目をさましたら、九時だった。よく眠ってさめた時特有の、疲労がなくなったために、かえってけだるいような感覚がある。

啓作はカーテンを、ついでに窓を開けて、また寝床にもどった。三月とはいっても、まだ肌寒い空気が淀(よど)んだ部屋の中の空気と、いれかわりにはいってくる。窓からは前の邸宅の桜の梢(こずえ)に日が当っているのがよく見え、気のせいか、枝のあちこちが海老(えび)茶色にふくらんで、もう蕾(つぼみ)になりかかっているようだ。

自動車がやかましく下の道を走ってゆく。空はぼんやりと青い。今日あたりの夕刊は何年ぶりの温かさ、と書きたてるかもしれない。台所で妻の佳子が、朝食の仕度か水を流す音が聞える。そろそろ本格的な春だな、啓作はもう一度、布団を顎(あご)まで引きあげて、目を閉じた。

ジャーナリストの啓作にとって、都心にアパートを借りていることの最大の利点は通勤に楽なことである。勤め先までバスで十五分。昨夜だって、カメラマンの吉井と六本木で別れたのが、十二時半だったのに、一時にはもう布団の中にはいることができた。

啓作は目がさめてからの十何分かを、タバコを吸いながら新聞を読むこともあるが、今日のように



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目を閉じて妄想にふけることがある。彼には一つの夢がある。それは江戸時代、それも文化文政といわれる太平の時代に、髪結いの亭主にうまれたかったということなのである。

一日中、ゴロゴロして、女から養ってもらうんだから、さぞかし楽しいだろう。そう思いながら、彼は自分がうまれるべきであった境涯を空想してみる。

彼は裏長屋の二階にふと目をさます。下ではもう、女たちの話し声がやかましく、びんつけ油のにおいが二階までたちこめている。雨戸を開けていると、たすきがけの女房のお佳が、手拭をかけた箱膳を持って階段を上ってくる。

「お前さんの朝がおそいもんだから、御飯がさめかけちまったけれど、がまんしておくれよ。お汁は今、火にかけたから」

そういう時には何と答えるのかな。

「いいってことよ。お前も忙しいんだから」

と言うのかな。それとも髪結いの亭主というのは一種のひがみがあるし、女房は女房で、自分が女腕一本で亭主を養っているという事実のために、女らしくしようとするあまり、一種のマゾヒズムにおちいっているから、

「何を、このアマ、亭主に冷飯(ひやめし)くわそうてのか。ベラボウメ」

と言って、お膳をたたきつけた方がいいのかな。すると、お佳の奴は、青白い顔をして手をついて、

「堪忍しておくれよ、今朝は早くからお客がたてこんで……」

「いや、カンベンならねえ」
啓作も驚いたのだが、最後の一言は本当に声になっていた。もっとも、妄想にふけっている時はよく、思わず妄想の中の言葉を独り言みたいに言ってしまうことがある。
「あなた、おきてたの。チーズオムレツがうまくできたのよ。あがらない」
お佳ではなく、現実の妻の佳子の声だった。
「十時半にデザイナーの神山さんの所に行くことになってるから、あんまりゆっくりできないの」
佳子もある婦人雑誌に勤めてファッションの仕事をしている。二年前に啓作の雑誌でファッションの世界の内幕のような記事を作った時、取材に応じてくれた一人が佳子だったのだ。啓作は一目で佳子が気にいり、必要以上にたっぷり取材し、そのお礼だといって、バーに連れ出した。あげくの果てに、彼女をアパートまで送ってゆき、儀礼的に、「お茶でも上ってゆきません」と言った言葉にしがみついて、図々しくも、女一人の部屋に上りこんだ。しかしひどく酔っていたもので、佳子がお湯を沸かしに立っている間に、長椅子に倒れて眠りこんでしまった。
朝になって、何度も謝って、朝食を御馳走になり、ついでに求婚したのであった。その時の朝食がチーズオムレツなので、佳子は何かというと、よくこれを作るのである。
歯を磨いてチーズオムレツとコーヒーを飲みながら、佳子と次の休日の計画の相談をした。どこかひなびた温泉へ行こうと啓作は言った。
「つまり、眠りにゆくのさ。朝飯くったら、床をとってもらって、また寝る」
「いやよ。そんなの。宿の人にヘンに思われるわよ。昼間っから、何かしてるみたいで」

「何したっていいじゃないか。夫婦なんだぜ。余計なお世話だ」
啓作は佳子を抱きよせた。彼の欠点は、妄想と現実がいつも混乱する点にある。
「ダメよ。時間ないんだから。そんなことすると、靴下がダメになるじゃないの」
彼は手を放した。大腸の下部に圧迫を感じたからである。彼は新聞を持って、トイレにはいった。
やがて、ドアをトントンと爪ではじく音がして、
「いってきます」
という佳子の声が聞えた。
トイレの中で、啓作はもう一度、髪結いの亭主の夢を追った。
朝飯をくって、お佳から小遣をせびって、店から外に出る。店先で順番を待っている二三人の女は、じろりと彼を眺める。五十くらいの髪の薄くなった婆は、
「なんだろう、一人前のいい若い者が、女の稼ぎに頼って、遊んで暮しているなんて、ほんとに罰当りだ」
と思っていることくらい、彼はよく知っている。しかし、中には物好きの客もいて、そのために、お佳は先月も半狂乱になってしまった。
「いや、あの時は、全くすごかった」
啓作はタバコを水洗の便器にすてながら呟いた。彼がホステスと浮気したのである。別にその女を好きという訳ではないが、彼は深夜、女をアパートまで送ってゆくと、そこへ上りこむという悪癖があるらしく、その時もつい、そういうことにならないと義理が悪いような形勢になったのである。

佳子はそれが自分の求婚された状況と似すぎているために、一層、怒った。そして自殺するというので、啓作は睡眠薬や先の尖った刃物をしまいこんで、ヒステリーの一番激しい三十時間ばかりは不眠不休で彼女につきまとっていた。何時発作的にビルの窓からとびおりるか不安だったのである。

とにかく、江戸時代の啓作はお佳から小遣をもらって、清元の師匠の二階へ行くのである。そこには町内ののらくら者が、朝から酒と花札を用意して待っている。途中、町内の頭から声をかけられる。

「町内の花見の手拭の図柄だがね、今年も何とか一つ面倒みてやってくんねえ」

想像の中では、江戸時代の啓作は染物屋の職人が身を持ちくずした、ということになっているのである。

「ああ、いいなあ」

彼は溜息をついてトイレを出た。もう十時になっている。

いくら十五分で行けるといっても、急いで会社に行かなければならない。

## 二

しかし、ふとしたことから、啓作は髪結いの亭主になれることになった。つまり失職したのである。

事のおこりは下らないことだった。編集会議で、新参の編集員が青くさいプランを持ち出した。編集長はそれを黙殺した。副編集長の啓作がそれを支持した、というごくありふれたケースだった。

別にその新人のアイディアがよかったのではない。新左翼といわれる運動に参加している娘の生活の日常性と、それを乗りこえようとする願いをこめた運動とを、写真と文章で扱おうというのだった。

「手製の壁掛けがかかっている部屋で、女の子がひじきの煮たのでメシくってる写真か。そんなのは、女性週刊誌にまかせておけ」

編集長に言われて、当人は不服な顔をしたし、二三の若い編集員も、顔をあげて、何か言いたそうにした。そういう気運を察して、もう一度、討議の場をあたえるのが、副編集長である啓作の仕事の一つでもあった。

「片山さん、そうは言っても、若い人には若い人の言い分があるんじゃないですか。新左翼、新左翼って、アカよりももっとこわいオニみたいなことを言われているけれど、実際はどこにでもいる平凡な若者の、当り前の願いだってことを、彼らは訴えたい」

「そんな写真よりハダカ。スカートの下から見上げた写真を五、六枚並べて、ハイ、これは誰のでしょうか、とやった方が、グッとくるんだなあ。啓ちゃん、あんたも、この商売でもう十年だろう。分ってるじゃないか」

片山編集長は言葉から受けとられるほど、エロを売物にしようと言っているのではない。彼の鬼瓦みたいな人相と、酒で荒れたガラガラ声からすると、ちょっと想像しにくいことなのだが、片山は非常な照れ屋なのである。

啓作が新入社員のころ、五年ばかり先輩の片山が新宿の裏へ飲みに連れていってくれたことがあ

る。そこへ女の子の流しが来た。警察がうるさくて、子供が深夜の盛り場でかせぐことはできなくなっていたと思うが、そこは昔、青線とかいって小さなバラックが立ち並んだ私娼の街で、元々警察の目が届きにくい所だった。

「旦那、この子の学校の給食費が払えないんだ。歌わしてやっておくんなさい」

傷だらけのギターを持った目付きのよくない男が、その後ろについていた。

「うるさい。へたくそな歌なんか聞けるか。子供は帰れ、お前なんか、赤とんぼの歌でも歌っていればいいんだ」

「へ、赤とんぼ、夕焼け小焼けの赤とんぼですね」

男が揚げ足をとるように言って、ギターを鳴らしはじめた。啓作は流しというよりも、ゆすりのような感じを受けて、片山を引張って逃げだしたくなったのだが、小学校五六年と思われるその女の子は歌いはじめた。

「夕焼け、小焼けの赤とんぼ」

リボンをつけて、白粉をぬり、紅をつけた顔で歌われると、むしろ気味が悪かった。白粉が白すぎて、女の子の白目が黄色くにごって見える。ふと片山を見ると、彼は白木のカウンターの上におおいかぶさるようにして、涙を流していた。それは震える手の盃からこぼれる酒のように、ポタポタと台の上にしたたるのだった。

そのくせ流しが帰ってしまうと、元の鬼瓦の顔にもどって、

「ああいうのは、夫婦の場合もあるんだってな。十一か二の女の子が三十男の汚れ物の洗濯から炊事



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com